

牛脩

しかり

年

石川達三

しかりし年月

石川達三

新潮社版

愉しかりし年月

昭和四十四年四月三十日 発行
昭和五十四年五月二十日 二十三刷

定価 一〇〇円

著者 石川達三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 東京都新宿区矢来町七一六二

電話業務部 (〇三三) 二六六一五一一
電話編集部 (〇三三) 二六六一五四一一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

愉
し
か
り
し
年
月

あの日は朝から大変な雪だった。風の無い日で、大きな雪が空からもさもさと無限に落ちてきた。まるで空の上の方がみんな雪になってしまったように思われて、息苦しかった。弔問に来て下さった客の黒い服は雪にまみれ、何かしら、亡くなった良人の魂が雪と化して、あの人たちの肩に降りかかってくるように見えた。

雪は夜まで降りつづき、一尺二、三寸もつもった。私の気持は一日じゅう冷えて、かじかんで、固くなっていた。駄と心が二つに分裂していて、一つに融けてくれなかった。流れる涙さえも自分の涙のように思われず、心がどこかに失われていた。

きのうが初七日。今日はもう八日目。

庭の日陰にはいまもあの日の雪がまだに残ってはいるが、梅の花がぼつと白く見えはじめた。新しい春がここにもやって来る。何のための春だろうかと疑ってみる気持は、未亡人という孤独な境遇にまだ馴染んでいないからだ。私は庭下駄をはいて芝生に降りる。芝はまだ冬のままだ。

枯草の色をしているが、片すみの日だまりには水仙の青い芽が出そろっている。幾片も緑の葉を重ねて、五本の指を立てたように空をゆびさす。春を招く指。季節は土の底からよみがえって来る。霜柱の下で春が育てられている。

この春を、どうすればいいのか。何の方針もない。私は独りになった。独りだからといって、どうということもないが、今から本当の老後はじまる。老後にどれだけの意味があるのか、まだ私には解らない。人々は老後の生き方について、聡明で堅実な考えを披瀝する。どれもこれも立派だ。しかし結局のところ私には、言い逃れのように聞える。もっと生きていたための口実のように思われる。

私は空をあおぐ。澄んだ青い空。そしてまことにむなしい空。私はこれまでの生涯のむなしさを思う。愛のむなしさ。永い永い人間関係の生活。それもいまはすべてむなしい。しかし空しいままに充実していたように思われる。この感じ方は矛盾だろうか。私にはそれよりほかに人生はなかったし、後悔もしない。空しいままに、やはり私は愉しかった。

私は空を仰ぐ。空を仰ぐことは、ずっと以前の、遠いはるかな私の過去をふりかえることと、同じような気がする。五十年もそれ以上ものあいだ、私は一人の女だった。女であることに束縛され、女の範囲から外に出ることはできなかった。そしてひとりの女として老いてきた。いま私

に後悔があるとすれば、それは私が何かのあやまちを仕出かしたということではなくて、もっと沢山の、いろいろな、悪いことや恐ろしいことや、恥ずかしいことや乱暴なことを、いっぱい、して置けばよかったということだ。私の生涯の、幾つかの愛がむなしものであるならば、悪い行為や恥ずべき行為だつて、やはり空しいに違いない。むなく消え去つてしまふものと解つていたならば、その前に立つて躊躇する必要はなかつたのだ。

ああ男たち……と私は思う。私にとって、何ものにも替え難い貴重なものは、やはり男たちだつた。私の生涯は男たちによって充たされていた。むしろ言うなれば、私に女としての命を与えてくれたものは、男そのものであつた。優雅な男、小心な男、謹直な男、ふてぶてしい男。それからまた傲慢な男、自分を見せびらかす男、狡猾な男、卑屈な男。考えてみると笑い出したくなる。おかしなげだものだ。そしてほんの時おり見かける物静かで重厚で、無限に豊富な知識と感情とを内にたたえたまま、その自分の重さにじつと耐えているような男。……またそれとは逆に、体力と行動力とに充ちあふれていて、豹のように俊敏に、隙のない姿をして、聞志をいっぱい蓄えたまま、自信にみちてにこやかな、ゆとりを見せている男……。

私の生涯から男たちの姿を取り去ってしまったら、あとには何も残らない。それは無限に豊富な玩具だつた。危険

で、有毒で、美しく、滑稽で、魅力的で、変化に富み、理解し難い玩具。スフィックスのように謎だらけで、凶悪で、しかも善良で、女を殺す力をもちながら、女をよみがえらせる別の魔力をも持っている。信じれば裏切られ、疑えば自分が成り立たない。どうすることもできないほど、手に余る、むずかしい玩具だつた。ひとつの迷宮。出口の見つからない迷路。

私はその迷宮のなかに深入りしていた。出口を探しながら、実際にはますます深く迷いこんで行つた。私は後悔しながら、後悔してはいなかった。私はみずから矛盾していった。むなしさを歎きながら、心は充たされていた。私は闘いながら妥協し、愛されながら裏切られていた。そして私自身、彼等を受しながら彼等を裏切つていた。彼等が私にとって貴重な玩具であつたように、私自身も彼等の玩具であつた。そのような矛盾も裏切りも、私にとっては当りまえな事であり、むしろその不合理と矛盾とによって、私の心は隅々までぎつしりと充たされていた。

私は決して善良な、あるいは貞淑な女ではなかつた。私は人から褒められるような女になりたいとは思わなかつた。褒められたいと願う心は、一種の虚栄心にすぎない。私にはたくさんの秘密があつた。秘密が私の心を充たし、秘密の重みに耐えていることが、私にはたのしかった。誰も本当の私自身を知らない。私はひとりきりで、自分だけ

のおもちや箱に嚴重な鍵をかけ、自分ひとりでのしんでいたのだ。

あの雪の日、焼香の人たちも絶え、三人の僧も控室にひきあげたあと、傘の雪をはらいながら葬儀場にはいつて来た男があった。真白な髪、年老いてはいるが健康そうな顔つき、一文字に結んだ唇。見たことのない男だった。多分亡くなった良人の仕事のうへの知人だろうと、私は思っていた。

彼はしずかに焼香をすませると、そのまま真っ直ぐに私の方へ歩いて来た。私のそばにはもう誰も居なかった。客は立ちどまり、錯のある低い声で、

「桜井さん、どうも、久しぶりです。このたびは……」
と言った。

私はおどろいて客の顔を見た。私を生家の名前で呼ぶからには、何十年も前からの知り人であるに違いない。

「あら……どなた様でしたかしら」

「解りませんか」と客はかすかに笑った。「年をとりましたからね。もう四十年もむかしのことだ」

私は声を出して叫びそうになった。あのひとだ、あのひとだ。……私は幽霊に出会ったような戦慄を感じた。そしてようやくかすれた声でつぶやいた。

「麻生先生……」

「ちょっと、急にはお解りにならないでしょう。まもなく七

十になりますからね。しかしあなたは若いな」

「でも、先生はお元氣そうで……」

麻生先生は胸のポケットから一枚の名刺をとり出して私に渡し、

「どうぞ、お大事に……」と会釈すると、七十ちかい人とは思えない達者な足どりで、ふたたび降りしきる雪の中へ出ていった。

不思議なめぐり会い。良人の死が、あの人をもう一度私のそばに引き寄せてくれたのだった。私は取り残されて、祭壇をふりかえって見た。黒いリボンをかけた良人の大きな写真を、手伝いの人が祭壇から取りおろそうとしていた。頭の禿げた、肥ってつやつやとした、仕合せそうな表情。

この人が死んだとは信じられないほど、健康そうな顔……。私は胸のなかでこっそり笑った。(あなたは何も存じなかったわね……)

私は良人を裏切り、先生の妻を裏切り、あるいは私自身をも裏切っていたかも知れない。人を裏切ることのたのしさ。その分だけ私は秘密をもち、豊富になり、複雑になり、虹のように幾色にも分裂して、どれが本当の自分の色だか解らなくなっていた……。

□

麻生参吉の思い出は、柴田明子と一対になっている。細

おもての、古風な日本的な美人だった。いま生きていれば、もう六十過ぎの、見る影もない老女になっているはず。あの頃は憎くてたまらなかったが、若い女同士の憎しみというのも、他愛のないものだった。彼女は美人だったが、私だってその頃は容貌に自信があった。小学生のころには西洋人形と仇名あだなされたくらいで、少しばかり日本人ばなれのした顔だだったから、柴田明子とは対照的だった。自分では明子よりも私の方がずっと現代的な美人だと、ひそかに己惚れていた。

明子はどういう訳か、眼ざわりな女だった。末っ子のわがまま娘で、お洒落で、変に甘ったれで、そのくせ美貌をひけらかし、それを仲間の学生たちが羨望し、彼女らの通俗な人氣が明子にあつまっていた。明子は婦人雑誌の口絵の和服姿の写真のモデルにされたり、薬品の宣伝ポスターの写真に出されたりしていた。だから小遣いもたくさん持っていて、仲間の連中を喫茶店にさそったり映画に連れて行ったりして、いわゆる柴田グループをかためていた。それで私は彼女等から除外され、白い眼で見られていた。私に冷淡にすることが明子に媚びる手段になっていたらしかった。私はそういうグループの連中の心理を軽蔑していた。それねみながらへつらい、うらやみながら憎み、憎しみを押しかくして明子の機嫌をとっているような仲間だった。彼女は明子に対する共通の劣等感をもちながら、誰よりも多

く明子に気に入られようという、下等な競争をひそかにくり返しているのだった。若い女仲間には必ず有る、幼稚な集団心理である。ところが私には明子に対する競争心はあるが、劣等意識はない。

明子は痩せてひよろした柳腰であったが、私はもっと豊かな体質で、運動でも学問でも明子に負けるものは一つもなかった。だから柴田明子がグループを造って私を除外していたというのは、今から思えば私に対する明子の劣等感から出た行動であったかも知れないのだが、当時の私はどうしても明子が眼ざわりでならなかった。

しかしそれだけの事ならば、格別なにごとも起りはしない。別の第三者、つまり男性という火付け役が登場してくると、両者の関係は紛糾することになる。私たちは女子薬学専門学校の学生だった。そして私と柴田明子との間に登場して来た火付け役が、麻生先生だった。

先生は製薬会社の研究室に籍があつて、週に二、三回だけ私たちの教室で化学を教えていた。まだ若くて独身だというだけのこと、私は別に好きでも何でもなかった。筋肉質のスポーツマンのような体格で、髪をぼさぼさにして、気さくな男だと思っていた。柴田明子が眼ざわりであったように、この先生も何だか眼ざわりだった。若い男が眼ざわりに思われたというのは、彼の持つ一種の男臭さの為であったかも知れない。私はそれを何となく不潔なもの

に感じていたが、明子のグループがすてきな先生だと言つて騒いでいたのも、恐らくは私と同じものを感じていたためだった。

(すてきな先生)というのは、女の学校では一種の流行のようなものだ。流行が街を支配しているとき、女はそれに抵抗することができない。流行はすなわち善であり美である。麻生参吉も或る時期、私たちの学校で流行している先生だった。

明子のグループの連中は、本当を言えばひとりひとり、麻生先生に個人的に愛されたいという願望をもっていたわけだ。しかし柴田明子という強敵が居り、彼女の美貌と人氣に勝てる筈はないので、彼女等の願望ははじめから絶望的だった。

絶望が決定的であることから、彼女等の心理は不思議な屈折をして行つたらしい。要するにグループの連中は自分のかわりに、柴田明子をけしかけて麻生先生に接近させようという行動に變つて行つた。それでは彼女等の絶望はさらに決定的になってしまう訳であるが、女の愛情というものは時として、そのような形で自殺するのだ。私には解る。

逆に言えば、完全に自分をあきらめさせることによつて、自分の被害を少なくし、心の平和を取りもどそうという、本能的な自衛の行為だと考えてもいい。しかしそれと同時に、結局は自分たちの嫉妬(しよた)の対象であつた柴田明子

を、麻生参吉という男の慾望の犠牲にしてしまおうという、一種の復讐心もまざつていただろうと思う。男から愛されるということはこの上もない喜びであると同時に、自分の大切な肉体を男というけだものの餌食に投げ出すという自殺的な行為でもあるのだ。

私はこれまでに十人以上の女友達、二十人以上の若い娘さんたちの結婚式に列席した。花嫁の新鮮な幸福を羨む氣持といつしよに、今夜かぎりでこの娘もおしまいになるんだ、ざまを見る、と言いたいような心理も動いてくるのだ。結婚というのは女にとって、一種の殘虐行為だ。そして女の愛の心理というのは、女にだつて解らない。もしかしたら愛情というのはその女からさえも独立して、勝手に動きまわるものかも知れないのだ。時として愛が女を裏切り、さらに愛が愛を裏切る。女の生涯の歴史などというものは、あのときどうしてあんなことになつてしまつたのか、後日になつて考えて見たつて、解りはしない。

□

晩秋初冬の夕方だつたと思う。私は電車の駅で偶然に柴田明子といつしよになつた。珍しく彼女はひとりきりだつた。

「今日はどうしたの。あなたのグループ、ひとりも居ないのね」と、私は多少の皮肉をこめて言つた。

「うん、みんな銀座へ遊びに行ったわ」

「どうしてあんた、行かないの」

すると明子は顎の細いきれいな顔に一種の影をうかべて、意外に素直な言いかたをした。

「つまらないのよ。もう飽きたわ。だってあの人たちの言うこと、きまってるんだもの」

彼女は退屈していた。その退屈が私にはよく解るような気がした。明子をとりまくグループの連中は、みんな嘘つきだった。媚びとへつらいと羨望とだけで彼女とつながっている、滑稽な仲間だった。誰も本心を言わない。誰も彼女に抵抗しない。抵抗しない友達ぐらい退屈なものはないのだ。夫婦にしたらってそうだと思う。互いに抵抗しない夫婦などというものは、それこそ本当の地獄だ。いわば柴田明子のグループというのは、それ自体が虚偽の集団だった。集団の内容は何もない。だからグループの中の会話だって、空白なおしやべりとへつらいとだけであった。

その事の虚しさ^{むしさ}を、明子は感じていた。意外にも彼女はグループの中心にあつて、孤独だった。孤独をもてあましていたらしい。私は彼女のさびしそうな言葉を聞いたとき、はじめて彼女に友情を感じた。

友情……そんなものがあるはずはなかった。私は反感と憎悪をもっていた。しかし明子の意外な告白を聞かされたとき、私は気持がなごんだ。相手の弱点を知ったことの喜

びだったらしい。つまり私が友情のようなものを感じたのは、実は友情ではなくて憐憫^{れんきん}の気持だった。私は多少の安心感、多少の軽蔑、そして多少の優越感の入りまじった、変なよろこびを感じていた。だからと言って反感がなくなった訳ではなかった。

「あんたたちのグループでは、麻生先生がとても人気があるらしいわね」と私は、意地のわるい探りを入れてみた。

「そうね。みんなよく噂をしているわ」

「先生のおうちへ、みんな遊びに行ったの？」

「いいえ、そんな相談をしたことがあっただけよ」

「そう……卒業したら、あんた麻生先生と結婚するんだって聞いたけど、もうきまったの」

「あら、冗談じゃないわ。誰がそんなことを言った？」

「誰かから聞いたわ。すてきじゃないの」

「ひどいわ。わたしあの先生のことなんか、何とも思っていないわ」

「だけど、そういう話はあったんでしょ」

「うそよ。なんにも有りゃしないわ」

「でもねえ、火のない所に煙は何とかがって言うわ。二人の間にか有ったんでしょ」

「違ふ。絶対に何も無いの。神様に誓うわ」

「そう……信じてもいいのね。それじゃわたし安心した」「何が安心なの？」

「わたしもしかしたらね、あの先生と結婚するかも知れないわ。もちろん何もきまった話じゃないけど。……その時は、お祝いしてね」

私はでたらめを言った。つまりその嘘が明子の本心を探るための狡猾な罠^{わな}だった。そういう意地のわるい才智を、私はいつから身につけていたのだろうか。もしかしたら女のもつ先天的な悪智恵であるかも知れない。私は根も葉もない嘘をついて、結局は柴田明子に挑戦状をたたきつけたようなことになった。前^ま以てそんな計画を立てていた訳ではない。ただその場の行きがかりで、そんなことを言ってしまったのだった。



むかしの本郷のあのあたりは、昭和二十年に戦災をうけて、何も残っていない。丘が丘であり、谷が谷であるだけ。文字通り国やぶれて山河ありという姿だった。いまの本郷には思い出もなにもない。

深い植込みのある、古い家だった。十二月にはいつていただろうか。私は夜を待って、忍び足でその家を訪ねて行った。いまから思えば、(若気の至り)という一語に尽きる。愚かしいことには違いないのだが、愚かしいことを向う見ずにやってしまった、そういう(若気)が私にもあったのだ。筋道の通らないような行為が、その当時は、ただ

一筋の、これよりほかに生きる道はないというように思われたものだった。

立派な応接間だった。麻生先生はこまかい紺の着物に、つい羽織をかさねていた。学校で見るときとは違って、ずっと身近な、書生あがりとも云うような若々しい姿だった。先生のお母様らしいひどく肥った婦人が紅茶をもって来て下さった。

化学のわからない所を教えていただくというのが、私の訪問の口実だった。先生は煙草をくわえたまま、面倒くさそうに私の質問に答えて下さった。私は十ばかりの質問を用意していたが、二十分ほどで勉強は終った。私はノートを閉じて、

「有難うございました」と挨拶した。それから後が私の闘いだった。

「お茶を飲みなさい。……君は薬剤師の資格をとって、どこかへ就職するのかね」

「父の薬局を手伝います」

「ああ、そうか。それはいいな」

「先生……」

「何です」

「質問をしてもいいですか」

「うむ、何のことだね」

「学校のことでないんです」

「うむ……どうということ」

「先生は独身ですか」

「そうだよ。それが、どうかしたかね」

「私たちのクラスの、柴田明子って、ご存じですか」

「ああ、知っているよ」

「先生はあのひと、どう思っているらっしゃいますか」

「別に、どうも思っていない」

「先生はあのひとと、結婚なさるおつもりですか」

「そういう質問には、答える義務はないと思うな。君には何の関係もないことだろう」

「つまり、私には言えない、という意味ですか」

「そうではない。答える必要がないということなんだ。君の側から言えば、僕から答えを要求する権利がないということさ。つまり、個人生活に立ち入り過ぎた質問であるということだ。わかるかね」

「わかりました。……やっぱり本当だったんですね。私は噂だけかと思っていました」

「そんな風に勝手に誤解してはいけませんよ。僕はそんなことを言っていない」

「いいんです。解りました。……先生はいつから柴田さんと、個人的につきあっているんですか。本当のことを教えてください」

「困ったひとだね。……個人的につきあったことは無い

よ。教室以外で会ったことは一度もないんだ」

「……信じないわ」

「ふむ……信じないんだったら、何を言っても無駄だね。

僕は柴田君と結婚する予定はないよ。これだけ言ってもまだ信じないかね」

「いいんです。解りました。……帰ります。どうも失礼いたしました」

たしかそんな風な会話だったと思う。しかしこうしてまともにぶつかって見ると、男というものは、何かしらてごわいものだった。私は自分で、固い壁をたたきながら駄々をこねているような気がした。何のためにわざわざ先生の家を訪ねて行ったかと云うと、その前に駅で柴田明子に会ったとき、その場の行きがかりで口から出まかせに、（もしかしたらあの先生と結婚するかも知れない……）などと言ってしまった、その言葉の辻つまを合わせるためだった。つまりほんの少しだけでも麻生先生と個人的な関係をつくっておかなくては、あの時の私の言葉が嘘になる。だから、先ず嘘をついて置いて、次にその嘘を少しだけ嘘でないものに造り直そうというような、ばかばかしい話だった。目的がそういうことであったから、化学の勉強をしただけで帰ってしまったのは、目的を達したことにはならない。私が立ちあがると先生もソファから立った。立つと私より五寸も背が高かった。

「余計なことは考えないで、自分の勉強だけちゃんとやりなさい。あと三、四カ月で卒業だからね」と、先生は先生らしいことを言った。何だか私の訪問をうるさがっているような言い方だった。

私はそれに反撥を感じ、ドアのところであまり向いた。それからしっかりと眼をつぶった。

「先生、すみません。ここまで来て下さい」

「何だね」

「お願いがあるんです。……今夜の思い出に、キスをして下さい。ちょっとだけでいいんです」

いまごろの娘なら、こんな事は何とも思っていないだろうが、あの頃としてはずいぶん思い切った話だった。そんなことを敢えてしたというのも、いわば一種の反抗であつたと思う。先生への反抗、柴田明子への反抗。それに多分、私自身への反抗もあつたに違いない。私はいわゆる純潔な処女であり、私の躰にはどんな男の指紋もついてはいなかった。その事を誇る気持もあり、その事を煩わしく思う気持もあつた。私は何だか麻生先生を憎んでいたようであつたが、憎んでいたからこそ接吻をしてもらいたいのだった。つまりこの先生に裏切り行為をさせたかった。先生が柴田明子を裏切ったら、私の勝ちだという気がしていた。

先生は変におちついた口調で、

「君はどう考えているか知らんが……」と言った。「そう

いう事は、軽率にしてはいけないものなんだよ」

「わかっています。でも、お願いします。誰にも言いませんから……」

「僕は自分で責任をもてないような事はしたくないね」

「先生に責任をもってもらおうとは思いません。私が勝手に希望しているんです」

「いやだね」

「ちょっとだけでいいんです」

すると私の両肩の上に先生の手が置かれた。

「君の考えていることが、僕にはよく解らん。……自分の美しさを大切にしないで、僕にはよく解らないよ」

その言葉のあとで、私の唇になにか柔らかいものが触れた。私のからだは硬直し、心臓が破れそうな脈を打った。つまりそれが、自分の躰でもって男というものを感じた最初の経験だった。一秒にも足りない接触だったと思うが、その一秒で私は何もかも解つたような気がした。男というものが解つたのではなくて、女というものが解つたのだ。要するに新しく自分を発見し、自分の躰の硬直に驚いたのだ。私は舌が引きつるような思いで、切れ切れに言った。「先生……さっきは答える義務がないとおっしゃいましたけど、こんどは答えて下さる義務があると思うんです。

……柴田さんと本当に、結婚なさるんですか」

「なるほど。解つたよ。そんなことだろうと思った」と先

生は笑った。「あれが君の畏か。こわいお嬢さんだな。

……義務があるのなら言いましょ。いまのところ柴田明子とは個人的に何の關係もない」

そのとき麻生先生はたしか、(疑心暗鬼を生ず)という漢語を使った。どんな字を書くのかなと私は思った。

「君が勝手に疑っているだけのことだ。わかったかね。解ったら帰るたまえ」

夜の本郷の暗い寒い道を、うつ向いて急ぎ足にあるきながら、どういふ訳か私は、いきなり燃え立つような恋を感じていた。息苦しくなり、汗をかいていた。一秒にも足りない唇の接触だけで、自分のからださがたに崩れ、発熱しているみたいだった。しかしそれは駄だけの反射的な戦慄であって、私の精神とは無關係だった。だから恋でも何でも無い、肉体感覚にすぎなかった。感覚は火をつければ誰だって燃える。

もともと唇の接触などということに、精神的な深い意味があるはずは無い。それが恋人たちの場合ならば、どんな小さな事でも大袈裟な意味をつけたがる。眼ばかり一つにも、かすかなほほえみにも、量り難いほどの意味を創造する。だから恋の喜びの大部分は、そのような自分勝手な創造の喜びであるに違いない。意地のわるい言い方をすれば、誤解のよろこびでもある。

幸いなことに私は、麻生先生を勝手に誤解してうれしが

るほど、先生を愛してはいなかった。だからあのときの肉体の戦慄も、ひとつの新しい体験というだけのもので、それ以上のことは何も無かった。先生の方にしても、特に私を愛していた訳ではなくて、私があんなことを求めたから、形ばかりの接吻を与えてくれたに過ぎない。したがってあの行為は全く内容のない、舞台の上の演技のようなものだった。



麻生参吉という男は、一体どういう人であったのか。実はいまだによく解らない。あの頃は多分二十九歳ぐらいだった。だからもう男としてのいろいろな経験はもっていたに違いない。教室では人気のある先生であったが、先生という堅苦しい感じではなくて、もっと砕けた、気楽な姿勢をもっていた。

私がいきなり訪問して、あんな非常識な希望をもち出したとき、彼は二、三のお説教めいたことは言ったが、それはむしろ彼自身への言いわけのようなもので、そのお説教とは逆に、黙って接吻をしてくれた。私の行為が愛によるものではなかったと同様に、あの人の行為にも愛の裏付けはなかった。

けれども男というものは、麻生参吉に限らず、愛情を伴わない愛慾行為をおこなうことができる。そのことに苦痛

も感じないし良心も痛みはしない。男は若い頃からそういうことの訓練をされているのだ。若い頃からと云うよりも、歴史的にそういう訓練をされ続けて来たのだと思う。

鎌倉時代には白拍子という女性があり、徳川時代には遊女とか湯女とか宿場女郎とか飯盛女とか、いろいろな種類の売笑婦があった。明治以後には芸妓があり娼婦もいた。この女たちは言うまでもなく、多かれ少なかれ愛慾行為を売りものにして生活を立てていた。

女性の場合にはこれらの職業的な特殊な女だけに限られていたが、しかし男たちは誰でもが、機会さえ与えられれば、心の愛情とは全く関係のないところで、愛慾的行為だけをする事ができるように訓練されている。むしろそれを本能的に要求していると言ってもいい。男性は容易に自分を二つに分けることができる。つまり先天的な二重人格者であるのだ。麻生参吉にしても、そうした性格は充分に持っていたに違いない。

堅気の女にはそういう訓練の機会はない。歴史的には数百年の武家の時代をとおして厳禁されていた。貞女二夫にまみえず、肌をふれるのは生涯にたった一人の男だけと、ぎりぎり一杯のところまで愛慾の自由を制限され、その小さな世界の中だけで彼女らの幸福をつくり出さねばならなかった。

そういう時代のそういう女性は、一人の男に自分の運命

を託しながら、その他、他の男という無数の男性を、ただ幻想の世界に思い描くより仕方がなかった。許された現実の世界がせまければ狭いほど、幻想の世界はひろがって行く。

いわゆる良家の娘、武家の妻女などは、どれほど豊富な性的幻想を心の奥ふかく押しかくしていたであらうか。私には想像がつかない。私のような、かなりの数の男性経験をもらった女にとっては、男たちは現実の世界だけに在って、幻想の世界はむしろ空白である。その点から言えば、幻想という自由な世界をひそかにたのしんでいた武家の女房たちの方が、精神的には私たちより何倍も猥褻であつたかも知れない。

私が薬学専門学校の学生であつた頃は、まだ選挙権こそ与えられていなかったが、もはや女權拡張の時代であり、自由解放の時代であつた。女が受け身であるあいだは、未婚の女は男から選ばれる立場であり、したがって女同士の恋の闘いは少なかったし、また有つても消極的であつた。しかし自由解放の時代になると、女もまた積極的に相手を選らぼうとする。その時から女同士の闘いも活発になった。

私はおとなしい女ではなかった。思想的に進歩していたという訳ではないが、性格的に、ただ手を束ねて選ばれる時を待っているというような、消極的な生き方はできなかった。柴田明子とのたたかいは、私にとっては一つの訓練にすぎなかった。麻生参吉を特に愛していたわけではな

ったから、明子との闘いもしたがって命がけのものではなくて、むしろ一種の人生勉強のようなものであった。

ところがあの訪問の夜から十日あまり経って、ちょうど年末の試験がはじまる直前に、私は思いがけなく麻生先生からの手紙をうけ取った。その手紙はとっくの昔に焼きすててしまったが、文面の要点はだいたい次のようなものであった。

（桜井流子さま——いきなりこんな手紙をさし上げて、あなたを驚かせることになるかも知れませんが、僕は一つだけあなたに聞いておきたい事がある。もし僕があなたに結婚を申込んだら、あなたは承知してくれますか。あなたの正直な気持を知りたいのです。なお僕の身辺には、僕たちの結婚を困難にするような悪条件はなにも有りません……）

私はおどろいた。あの夜のことについて、先生は男だから別に何とも思っていないだろうと考えていた。それがいきなりこのお手紙だった。こうなるともはや柴田明子との闘いなど問題ではなかった。

私はその手紙を百遍も読んだ。読むたびごとにいろいろな解釈がでてくる。歪めた解釈もするし、拡大解釈もする。それが手紙を読むことの面白さだ。私には麻生参吉の手紙に二つの目的があったように思われた。一つは、あの夜の私の突拍子もない要求が、一体何であったのか。その真意を知りたがっているということだった。要するに私が

どの程度まで先生を愛していたのか。それを先生は、たまたあれだけの行為からでは、量り兼ねていたに違いない。あまりに唐突であって、前後の脈絡というものがなかったのだ。ひとりの男が、私の心を知りたがって思い迷っている姿を想像すると、私は嬉しかった。私も男を迷わせるだけの魅力をもった、一人前の女になったのだという気がした。

しかし麻生参吉の手紙には、（もし僕があなたに結婚を申込んだら……）と書いてある。つまり彼はまだ結婚を申込み決心はしていないし、そういう明確な態度はとっていない。要するに仮定の質問であった。向うは仮定の質問を發しながら、私には確定的な回答をもとめている。私が喜んで承諾の返事をして、先方は責任を持たなくてもすむような書き方だった。つまり私の氣を探ってみただけのことであって、都合がわるければいつでも逃げられる（逆櫓の構え）だった。

彼の心に愛情は有ったかも知れない。有るならば正直に、（結婚したい）と言えればいいのだ。それが言えなかったのは、教え子に求婚して断わられた場合の、体裁のわるさを用意ぶかく避けたのだとも考えられる。しかし男が好きな女に求婚して断わられるのは、当然あることで男の恥でも何でもない。私はむしろ正式に求婚して断わられるくらいのは、はっきりした男が好きだった。麻生参吉は見かけによらぬ卑怯な男だった。